「大原御幸」

後白河院に仕える廷臣（ワキツレ）が登場し、これから院が、大原の寂光院に建礼門院をお訪ねになるため、山道を整備するよう、従者（アイ）に命じます。
ワキツレ…廷臣
畏まりました
アイ…従者
高倉天皇の中宮であった建礼門院（シテ）は、平清盛と二位殿の娘ですが、一門と共に早鞆ノ浦で入水した際、その身を救われたのでした。
そして今は、我が子安徳天皇と母二位殿の菩提を弔うため、大原の寂光院に隠棲しているのです。
面…孫次郎
ツレ…大納言の局
女院は大納言の局（ツレ）と阿波の内侍（ツレ）と共に、物思いをしては
シテ…建礼門院
涙で袖を濡らす日々を過ごしていました。
ツレ…阿波の内侍
そうしているうち、女院は大納言の局と共に、山へ樒を摘みにゆくことにしました。（中入り）
樒（しきみ）
マツブサ科シキミ属の常緑小高木。仏事に用いられる。有毒。
輿に乗った後白河院（ツレ）が、万里小路の中納言（ワキ）を連れて、寂光院へ御幸します。
ワキツレ…輿舁
ツレ…後白河院
ワキツレ…輿舁
ワキ…万里小路中納言
女院は花を摘みに外出中です
わたくし信西入道の娘、阿波の内侍です
一同が待っていると、女院が戻ってきました。
女院は法皇に、御幸の礼を述べ、問いかけに応じて、生きながら「六道」を経巡ったことを物語ります。
そして重ねて問われるまま、一族の最期のありさま、我が子安徳帝や母二位殿が入水するさまや、自分は助かってしまったことを涙ながらに語ります。
名残は尽きないものの、はや還幸の時となり、女院はしばし見送って、また庵室へと入るのでした。

画…水谷 弓